

第50回 全国高校生長崎平和集會に寄せて メッセージ

2023年8月8日

幡多高校生ゼミナールOB代表 橋崎律子(旧姓:山本)

第50回全国高校生平和集會の開催、おめでとうございます。幡多高校生ゼミナールOBの、橋崎律子と申します。昭和46年生まれで51歳。みなさんの親世代より少し上といったところでしょうか。ちょうど33年前の高校3年生の夏、長崎市で開かれた全国高校生平和集會に参加しました。

全体会では、幡多ゼミの仲間が広げた大漁旗をバックに、私が代表し発言。「幡多ゼミは“足元から平和と青春を見つめよう”をモットーに、地域に根差した平和学習をしていること」「私たちの調査により、第五福竜丸のように、高知県にも多くのビキニ被災漁船がいたこと」「漁船員は今でも被爆による健康被害に悩み、被爆者手帳の交付を求めていること」等を報告しました。この時は緊張のあまり、発言の途中、何度も嘔んだことを思い出します。

分科会では、全国の仲間の活動報告や意見を聞き、“同じ高校生なのに、すごいしっかりしてるなあ”と感心。交流会では、「ケサラケサラ」「陽気に生きようこの人生をさ」「ヒロシマのある国で」等、ギターを弾く高校生もいて、みんなで歌ったり踊ったり。原爆投下時刻の「ダイ・イン」では、地面に腹ばいになり、日差しも地面も熱かったこと等を思い出します。

幡多ゼミの活動で、一番よかったことは、他の高校の生徒と知り合え、話し合え、気兼ねなく言いたいことを言い合えたということです。社会のこと、平和のこと、今後の生き方などなど。お互い真剣なあまり、時には涙ながらに激論を交わすこともありました。顧問の先生方も生徒の話を真剣に聞き、温かく受け止めてくれました。学校の成績はそこそこの私にとって、ゼミは居場所であり、ゼミの仲間と会いに学校へ行くようなものでした。

二つ目に、ゼミの活動を通して、社会背景を意識してみるようになり、社会科の勉強がおもしろくなりました。今の自分に社会はどう影響しているのか、平和とは何かを考えるようになりました。ある時、小論文の演習で、「核兵器について」を書くことがあり、自分のゼミ活動の体験を書きました。その中で、「ビキニ環礁等の核実験による被災は、戦争そのものではない状態で起こった。つまり“戦争準備の段階でも、核被災などの被害がでる。だから戦争をしてはいけないんだ”ということに気づき、ハッとしたことを、今でも覚えています。自分の体験に基づく感想というのは、その人の言葉であり、説得力があります。みなさんにも、自分の体験から得た思いと言葉を、大事にしてほしいです。

それから、ゼミ活動の中で、「加害者、被害者、抵抗者の3つの視点が必要」ということを学びました。例えば、戦争にしても、加害の事実、被害の事実を知ることと同時に、戦争に抵抗した人の生きた方も知ることです。戦争に限らず、日常生活の中でも、不条理なことがいっぱいあるけれど、「ああ、問題を全て自分だけで背負うことはない。解決に向け努めているのであれば、自分を責めなくていいんだ。」と、平和のことを考える上でも道筋が見えたような気がして、どこか、ホッとしたことを覚えています。

三つ目に、ビキニ被災事件を掘り起こす手助けができたことです。1954年3～12月までに、汚染マグロを廃棄した延べ1000船の被災漁船が北海道から沖縄まで太平洋岸すべての都道府県で見つかっています。そして、2017年7月、国連の核兵器禁止条約第6条に、「戦争行為だけでなく、準備や核実験による被害も救済の対象に含む」という文言が入りました。これは、ビキニ被災漁船員を始め、マーシャル諸島での核実験被害者が長年訴えてきたことが実ったものです。核兵器廃絶に向け、少しでも役に立ててうれしいし、自分が幡多ゼミでしてきたことに、意義が見いだせたように思いました。

それでは、高校生のみなさん、集會では仲間同士、自由闊達にそして率直に、大いに語り合ってください。みんなの前で自分の意見を一つでもいいから、言ってみてください。それが、今後の自信につながります。また、私からのお願いですが、先生方、スタッフのみなさん、高校生が言うこと、思うことをそのまま受け止めてください。時にはヒヤヒヤすることもあるかと思いますが、どうぞ温かく見守ってください。よろしくお願ひします。

今回の集會が、みなさんの今後の人生を豊かにするものとなるよう、心から願っています。

以上